未来ある明日へ～探し彷徨う者～

路地裏の黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来ある明日へ〜探し彷徨う者〜

【Nコード】

N3067X

【作者名】

路地裏の黒猫

【あらすじ】

彼女は目を醒ます。

それは日常。

しかし、日常は辛くも崩れ去る。

初めて知った真実、そして自身の力。

彼女を取り巻く世界が急激に変化していく、その中で彼女が探し求めたものは？

本当に、本当にほしかったものは？

これは前作、未来ある明日へ、の改訂版です。

序章 崩れ去る日常、新たな日常

それは突然だった。

何時までも続いていくと思っていた。

それが始まるまでは。

この世界の外で彼女達が願った瞬間^{とき}。

双子世界は刹那の時つながった。

そして、世界の片割れの住人一人と、片割れの理の一欠けら入れ替わった。

長い眠りに付かされていた精霊たちは目覚め始め、足りない物を補うために人に触れ生存本能のままに、溶け込む。

この世界に流れ込んだ理は、ほんの一欠けら。

精霊達の存在するために必要な物すべてが流れ込んだ訳ではなく、片割れの世界に満ちている物は流れこまなかった。

結果、精霊たちは顕現する力を失い、世界を、自然を調律する力の大半をなくしていた。

しかし、零ではなかった。

彼らは溶け込んだ人の中に在る、力を糧に無意識に生きていく。

願われるまま、振るわれるままに世界に影響を及ぼしていく。

精霊たちは、血液に溶け込むように子々孫々に受け継がれていく。しかし、それは又別の物語。

今は、力に目覚めた者達、つまり精霊達とたまたま適合し溶け込まれた者達。

力なき者達、つまりたまたま適合できないただの人
力を持ったまま不幸にもこの世界へと堕ちたもの達。
彼らの物語。

一人の少女の物語。

刹那の時間世界と世界の境界が曖昧になり、異界の門となる亀裂が
現れる。

亀裂からは小さき異形共が、和紙に滲む墨汁のように世界に染みて
いく。

まだ亀裂は小さく、漏れでる物は小さい。

しかし、じきにそれは現れる。

亀裂を閉じる方法を誰も知らない。

知る由も無い。

それが何なのかも。

この物語は一人の少女の視点から始まり終わる。
無くした者を求めて、たった一言伝えるために。

この世界はゆがみ始めてた。

しかし、人々は強かで順応していくことが出来るだろう。

生き残ることが出来るなら。

力を正しく振るうなら。

ゆがみ始めた世界で少女たちは生きて、一人の少女が問う。

「貴方はどこにいますか？この声が聞こえていますか？修治さん。」

その声は世界の壁を越えられない。

崩れ去った日常、そして非日常が日常になるまでの物語。
求めた物を手に入れられたのか。
言葉は伝えられたのか。

それは、いずれ判るだろう。

さあ、彼女が目を醒ます。

物語を始めよう。

彼の物語と対を成す物語を。

日常・崩れる音（前書き）

この物語は、未来ある明日へ（もう一つの世界）、の改訂版です。
元の物語とかなり多くの共通点があります。

ご注意ください。

日常・崩れる音

誰かが呼んでいる気がした。

目を開ける。

木目の天井。

和室の独特の香りがする。

四隅に少し、煤けた蜘蛛の巣が付いてる。

ぼうつと天井を眺める。

私の部屋って和室だったっけ？

寝ぼけた頭で考える。

何か引つかかる、どうしてだろう。

ただ、思い出したいけど、思い出したくないような。

・・・そうだ、夢を見ていた。

とてもとても悲しい、つらい、冷たい夢だったような気がする。
まあいいや。

「そうだ、学校。」

携帯を探す。

手元に無い。

少しあせる。

ひやりとしたものが、背筋を流れる。

布団をめくる。

枕をひっくり返す

無い……無いっ!!

「あれ、携帯どこだ???どうしよう。」

携帯が無いと時間がわからないじゃない。
どうしよう、メールたまってるかも。
てか、学校どうしよう。

あれ?

学校……今日何日なんだっけ?

あれ、今日何曜日?

まてまてまて、落ち着け私。

え〜と此処は。

「そうだ、おじいちゃんの家に来てたんだ。」

そう、此処は父親の実家。

今は、4月末。

そう、思い出した。

……思い出したくなかった。

嫌な夢、思い出したくない夢。

夢と思いたかった。

でも、思い出してしまった。

何故、自分が自分の部屋にいないか。
学校はどうしたのか。
そして、いまこの日本で起こっていること。
自分の体のこと。

家族のことを。

「かあさん、加奈……。」

眩きと共に、涙が流れる。

ほんの数週間前まで普通に暮らしていた。
両親と共に。
でも、あの日。
あの日から、世界は変わってしまった。

~~~~~

「おはよう……。」

「おっは……。」

朝、いつもと変わらない朝。

学校の近くの急な階段を歩く。

花壇でもないのに、黄色い水仙が咲き。

坂の上、校門の脇にある一本の桜の木が、少し開花し始めた。

風も、温かくなってきたて朝と夜はまだ少し、肌寒いけど。

昼間は、日差しもあって少し暑いくらい。

少し下には、今年の新入生が友達同士だろうか、少し緊張した面持ちで歩いてくる。

首筋のリボンもきちっとつけて、髪の毛も黒。

ピアスの穴はあるかも知れないけど、ついてはいないようだ。

真新しいローハールを履いて、真新しい鞆を両手で持って上ってくる。

「一年生かわいいね〜」。

隣の同級生の近藤加奈ちかのかが呟く。

リボンはしていない、微妙に古ぼけた鞆を肩にかけるようにして持っている。

パツと見、判らないけど、彼氏からのプレゼントのイヤリングをしている。

首には、ネックレス。

お互いの名前が入ってるらしい。

お熱いことで。

初恋は実のらないというけれど、彼女達には関係なかったようで、中学から続いている。

Hはまだらしい。

「あんたはおやじかつ。」

「精神的には。」

「そこは全否定しようよ」

がつくりと、頭を下げて肩を叩く。

あはははか、きゃはは、どちらとも取れる笑い声。

そんな、桜が咲き始めた4月。

何時までも続くと思っていたんだ。

代わり映えの無いでも、私個人的には満足できる毎日が。

ずっとずっと、続いていく物だって。

無邪気に信じていたんだ。

私は、はなはな笹原翔子。

今年で、2年になる。

部活はバレー。

センターで、身長は170ぐらいあるが、アタック要員というより、相手のスパイクを止めるブロック要員だ。

髪は短く切つてある。

最近の悩みは、バレーで鍛えられて太くなってきた太もも。

隣の友人はむっちりしていて良い、というが私は嫌だな。

加奈みたいにスラッとした足になりたいな。

バレー好きだけど。

髪も伸ばしたい。

付け爪したり、イヤリングとかもしたい。

でも、部活の邪魔になるし、先輩ににらまれる。

ただでさえ、身長が高くて目立つのに。

「はあ。」

溜息がでる。

「なんですかあ？恋わずらいですかあ？？」

そついつて、人の顔をしたから覗き込む加奈^{ほか}。

一瞬頭を過ぎるある男性の面影。

「うつさい、リア充がっ！！」

「ええ、充実していますわよ私は。」

にこやかに……にやにやして言いやがる。

「もう、いいっ！」

私の心に何時もいる人の面影。

その面影を振り払うかのように、言葉と共にぶいっつと後ろを向いて歩き出す。

「あはは〜ごめんごめん。」

私は少し頑張って笑っている。
友達も。

この子はとてもいい子だ。

少し、余裕が出てきた。

周りを見渡す。

後ろから、「まって〜」という声が聞こえた気がしたがキニシナイ。

新入生達は微妙に顔引きつってるかな？
でも、良い顔だよ。

校門の前には、部活の勧誘だろうか。

あ。体格の良い新入生が野球部につかまった。
何故だろう、胴上げが始まってる。
新入生は鞆を先輩に預け（うばわれ）両手を胸の辺りで組んで固ま
っている。

あれ、野球部に入部する予定じゃなかったらどうするんだろ。
気にしたら負けかな？

「あ、あれはやりすぎじゃない？。」

「でも、面白そうじゃん。」

友人は指を指して笑っていた。

「ま、怪我させなきゃいいか。」

私も大概だ。

そんな、春先。

一応、幸せだったんだろう。

一応、恵まれているのだろう。

両親もいる。

祖父母は二人とも、長寿でいろんな病気してたけど、結局老衰だった。

祖父にいたっては、余命宣告されているのにその倍を生きて、最後まで笑っていた。

うん。

良い家族。

兄妹も、まあ仲いいし。

友達いるし、彼氏いないけど。

幸せな日々。

でもね。

その日々がどれだけ貴重で、どれだけ大切な宝物だったかなんてそのときは、判らなかつたんだ。

正直退屈していた、つまらないなあって日々思っていた。

思っていることができたんだ。

それが、幸せな事だってそのときは気づかなかったけど。

本当に、大切なもの、失いたくないものって、失ってから気づくものだと思う。

学校が、終わり。

部活紹介も終わり急いで着替えて、シャワーを浴びて走る。

私は見たいアニメがあったから、急いで家に帰った。

加奈は早退。

彼氏とデートらしい。

普通の団地。

駅前で、学校からも近い。

てか、学校は1キロぐらいいしか離れていない。

そんな団地の3階の角の家。

ソファに座って、私が小学生の頃から続いているアニメを見ていた。

でも、突然変わった。

「ええ、もうちょいなのに。」

一ヶ月前、世界各国になぞの球体が現れた。

それは姿を消して、何事も無かったかのように日常が戻ってきた。日本で、一人の男性が飲み込まれたという記事も小さく新聞に載っていたような気がする。

いろんな学者が仮説を立てたり、特番が組まれたりしていたけど。一ヶ月間何も変化が無ければ新しい、ニュースに埋もれて消えていく。

その程度のものだと、そのときまで私は思っていた。

『太平洋の中央あたりに巨大な建造物が現れ、未確認生命体が現れ近くを航行中のT国籍のタンカーが襲撃を受けました。』

それは、日常が崩れ落ちる序章だった。

「・・・映画か何かの宣伝？」

そうとしか思えない。

この科学技術の発達した世界で、未確認建造物？生物？太平洋の真ん中に登場???

「ありえないっしょ。」

まあ、ありえないことは時々おきてきていた。

黒い球体が発生して数日、人体発火や、鎌鼬が発生したり。

発狂したりする人がたつていう情報がネットを駆け巡ったけど。ニュースでも報じたけど。

身近にはいなかったし、直ぐに新しい情報に埋もれて消えて行っていた。

中には、魔法が使えるようになったとか、精霊が見えるとか。

魔物が現れたとか、ファンタジーなことを口走っている人も居たが最近見ないから、がせつただたのだろうと思う。

そのときまでは。

思いたかった。

全てはうそだと、信じたかった。

私だって、そんなこと口走っている人を見かけたらまず、精神科へ行くように進める。

変な人認定する。

ひどければ警察を呼ぶ。

画面を通してみても信じられない。

信じられるわけが無い。

でも。

「うそでしょ？」

テレビの中では異変が起きていた。

建造物の情報を垂れ流す見慣れたアナウンサーの顔から、また急に場面が変わり今度は。

「あ。」

この前行った、お店が写っていた。

テレビで見慣れた交差点、そこで異変が起きていた。
何かが崩れ落ちる音がした気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3067x/>

未来ある明日へ～探し彷徨う者～

2012年1月8日02時49分発行